

BEAUTY CLUB

国際美容協会
[ビューティクラブ]
2011春夏号 NO.704
Déjàvu

季節の行事をききもので楽しむ
家族のききもの
歳時記

季節の行事をききもので楽しむ



現代いまに息づく
伝統の美を探して

第6回

京和傘

和傘は古来、貴族たちの間で日傘などに使われていたものが、江戸時代中期に一般庶民の雨具として普及したものだ。

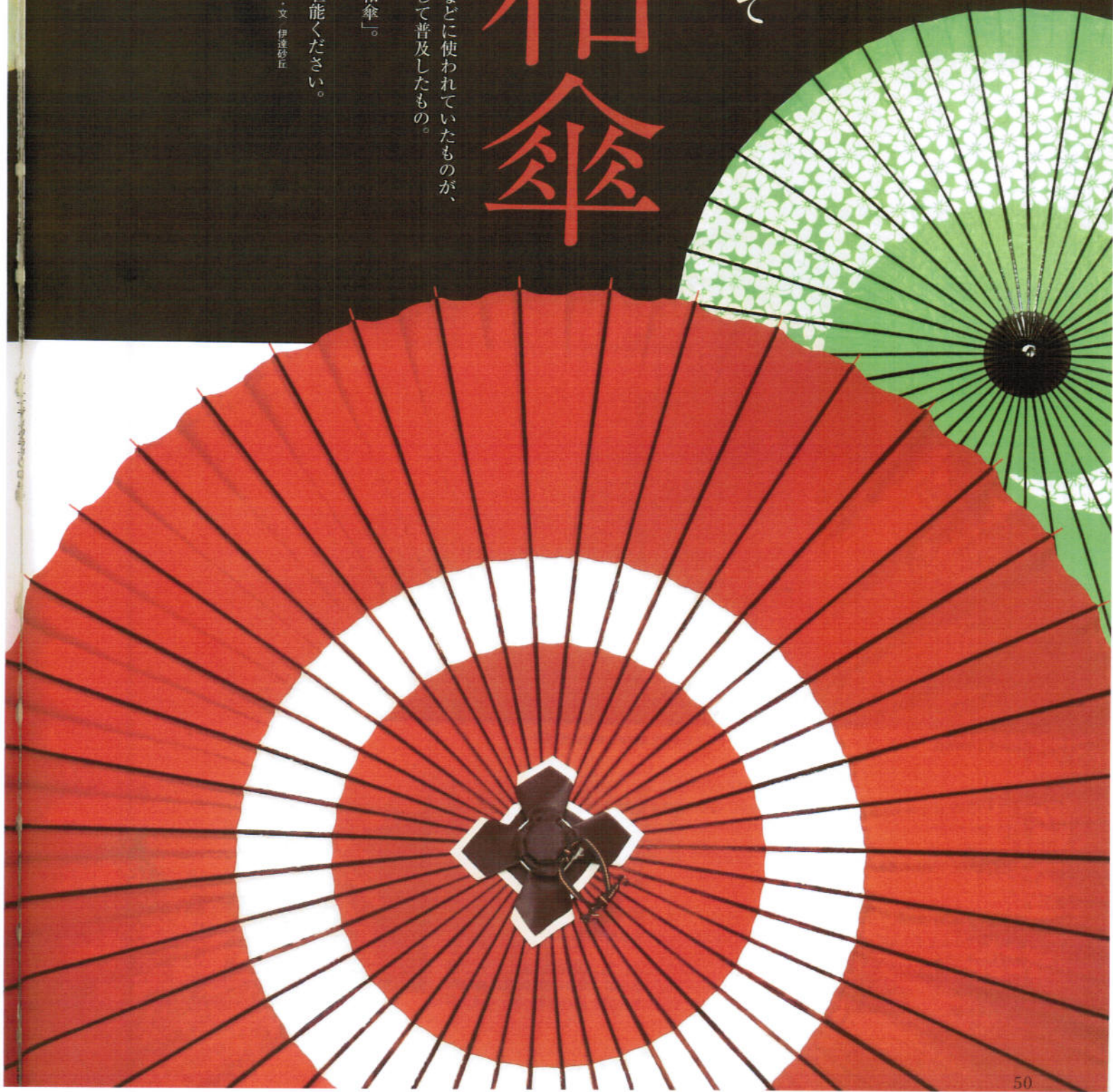
古都・京都に百数十年続く技法で、

一本一本丹精込めて作られる「京和傘」。

見るものの心をとらえて離さない、

優美で鮮やかな京和傘の世界をご堪能ください。

取材協力 京和傘 日吉屋 撮影 田村朋子 (Pond) 取材・文 伊達砂丘



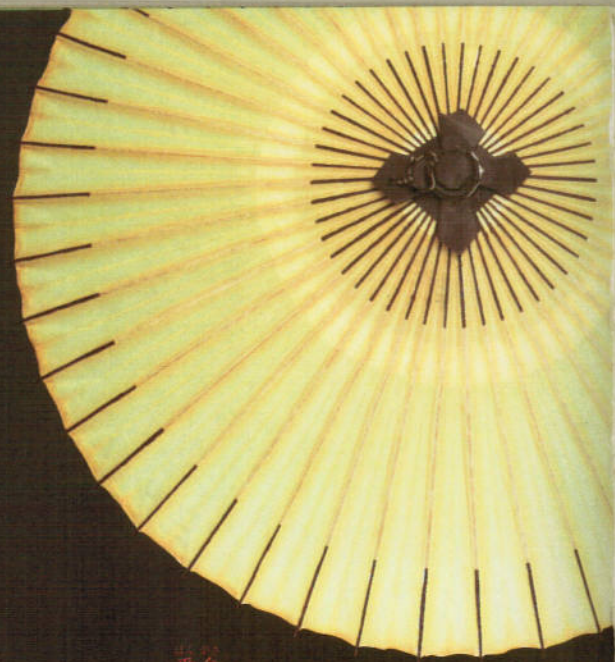
羽二重

和紙のほかに絹を重ねた羽二重は、美しいだけでなく雨にも強いのが特長。記念日などの特別な日に使いたい、最高級の和傘。(直径:1,160mm / 高さ:730mm / 骨目:44目,紫)

京和傘の

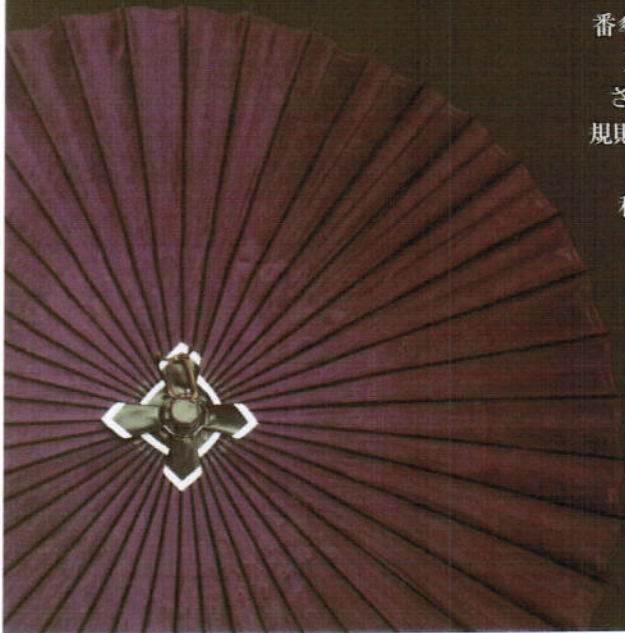
様式

番傘、羽二重、蛇の日傘など、京和傘には用途によってさまざまな種類があります。規則正しく並んだ竹の骨組みと鮮やかな色彩は、和傘ならではの魅力です。



番傘

太身の竹で作られたシンプルな番傘は、男性に好まれる普段使いの和傘。どんな和服にもしっくり馴染むので、和傘初心者にも人気。(直径:1,160mm / 高さ:750mm / 骨目:44目,白)



和紙日傘(花渦)

飾り糸の鮮やかさと、花渦柄の和紙のコントラストが美しい。



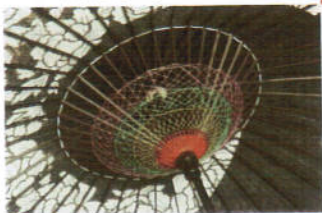
蛇の日傘(紫)

色染めた竹と飾り糸の鮮やかな黄色が高級越前和紙の紫に映える。



蛇の日傘(無地・赤)

和紙の色によって、開いたときの表情が変わるのも京和傘の魅力のひとつ。



番傘(白)

素竹と和紙のみが織り成す究極の美は、シンプルな番傘ならではのもの。

さかのぼること数百年前、中国から日本に伝わった和傘は、もともと雨具ではなく、貴族の日傘や魔除けとして使われていました。

「日本で和傘が雨具として使われるようになったのは、江戸時代中期に入ってからなんです。今では洋傘がすっかり定着していますが、実は昭和初期まで和傘も一般的だったんですよ」

そう語るのは、日本で唯一「京和傘」を製造する日吉屋の5代目・西堀耕太郎さん。店のすぐそばに茶道の家元があることから、直径3メートルの本式野点傘をはじめ、番傘、蛇の日傘、日傘まで、製作される傘の種類は多岐にわたります。

「和傘は一本の竹を縦に細かく割り、竹の節目と節目をつなぎ合わせて作ります。和紙日傘など小さいものでも、乾燥の工程を含めると、一本完成するまで2〜3週間はかかります」

伝統的な和傘だけにとどまらず、最近では西堀さん考案の和傘の技術を取り入れた照明器具が海外からも高い評価を得ているそう。

「伝統は革新の連続だと思えます。何年もかけて和傘が普及したように、50〜100年後、この照明器具が世界に普及していたらうれしいですね」